

# 予期せぬお礼状

先日、職場の若い同僚に頼まれて裏山へクワガタ虫を採りに行った。この年になっても少年時代の心は衰えず、思いもかけず久しぶりにワクワクした気分を味わった。やぶ蚊に刺されながら、汗だくになってめぼしいクヌギの木の洞（うろ）を丁寧に見て回った。

いい年の大人が100円ショップで買った虫かごを首から下げて木に取り付く姿を遠くで女房が笑っていた。幸い成果はあった。

梅干の入っていたプラスチック容器に穴を空けて、腐葉土を敷いた。小さな虫たちを入れて眺めると幼い頃の感情が蘇えるようだった。

翌日、意気揚揚と容器を下げて出勤し、同僚に手渡した。30代の若い同僚も、少年時代を思い出してか形相を崩した。しばしのクワガタ談義で職場は賑わった。

後日、予期せぬことに出会った。クワガタを所望したのは、若い3児の父でもあった。小学2年生を筆頭にちょうど虫に憧れる年頃である。私は、この同僚から1通の封書を受け取ったのだ。開けて見ると、中には幼い子どもたちからの手紙があった。

便箋一杯にクワガタ虫の絵を書いて、

「おじさん くわがたいっぱい ありがとう おせわを いっぱいします」

と習いたての大きな文字が踊っていた。片隅には、

「くわがた虫ありがとうございます。子どもたちは大喜びで、虫かごにかじりつきです。」

と母親からの一言が添えられていた。

このよううれしい礼状を頂いたことはなかった。近頃では、親が子どものすべきことをなんでも取り上げてやってしまい、子ども自身が社会的な体験の中で自己責任を学ぶことがなくなっていると聞く。私は、この同僚を心から褒めた。そして、若い世代にも、大切なことをきちんと伝える親がいることを頼もしく思った。

私は、この予期せぬお礼状をもらって心を育てることの大切さを痛感させられた。

早速、礼状への礼状を書いた。子どもたちはどんな気持ちで、私からの手紙を読んできたろうか。子どもたちの心に何かが生まれたらろうか。クワガタを求めて木に取り付いたときと同じようにワクワクしたのだった。

(広島県教育委員会ホームページ「子どもたちに伝えたい『心に響くちょっといいはなし』より)